

偏見ゼロを目指して思うこと

久留米聴覚特別支援学校 中学部3年 緒方 菜月

「偏見をもってはいけない。」と多くの方が言います。しかし私は、偏見を完全になくすということは不可能だと思っています。

なぜなら、人は生まれた時から家族や地域、文化や環境の影響を受けて育つからです。使う言葉や身近にいる人たち、それら全部を受け止めながら自分の中での「当たり前」を作り出していきます。だから、私たちは知らないうちに自分なりの当たり前を通して世の中を見てしまうのです。これが偏見の始まりだと私は思います。

私は生まれつき難聴です。四人きょうだいで、妹以外は難聴者です。難聴の姉がいるので、小さい頃から手話と音声があることが当たり前の家庭で生活しています。しかし、聴者の友達にそのことを話すと、「手話を覚えないといけないから大変そう。」と、よく言われます。

「大変そう」という言葉は、相手には悪気がなくても「耳が聞こえるのが普通だ。」というその人の「当たり前」を通して見ているからこそ出てきた言葉なのではないかと思います。友達は、偏見をもってそれを言っているわけではないのでしょうか、言われる度に私は、「手話を覚えることよりも、音声だけで会話することの方が大変なんだけどな。」と思い、友達との認識のズレを感じます。

では、「偏見は仕方のないものだから放っておくか。」と諦めてしまってよいのでしょうか。少しでも偏見で傷つく人がいなくなるために大事なことは、『『自分の当たり前は、相手にとっては当たり前じゃないかもしれない。』』ということに気づくこと。」なのではないかと私は思います。相手の当たり前を自分と同じだと決めつけず、相手はどう思っているのかなと考えを聞きながらコミュニケーションが取れれば、認識のズレでトラブルが起こったり傷ついたりすることも減るのではないかと思います。

私の通っている学校には、「居住地校交流」という、学期に一度、自分の住んでいる地域の学校と交流できる取り組みがあります。しかし、私は、小学五年生までは、居住地校交流を断り続けていました。理由は、声だけで喋られても何を言われているのか分からないし、うるさそうだし、考え方も全く違うから友達だってできないと思っていたからです。単純に知らない学校に行くのが怖かったというのも、理由の一つではありました。

しかし、六年生の時に、このままこの学校の中学部へ進むのか、地域の中学校に進むのかで進路に悩んだので、居住地校交流に参加してみることにしました。すると、手話に興味をもってくれる子や、分かりやすいように正面から話してくれる子がいたり、賑やかな中、ちゃんと話が通じ合えて楽しかったのも、私はそれ以来、「私は耳が聞こえないだけで、それ以外は聴者も難聴者も区別がない。」と考えられるようになりました。

偏見を完全になくすことはできないかもしれませんが、偏見を減らすことはできるのではないかと思います。そのためには、認識のズレが起こらないように、相手の当たり前を自分の当たり前とは違うということを意識しながら、コミュニケーションを取ることが大切だと思います。また、分からないことを分からないままにするのではなく、調べたり体験したりすることも大切なのだと思います。そのような努力を続けることで、認識のズレで傷つく人が減ればいいなと思います。